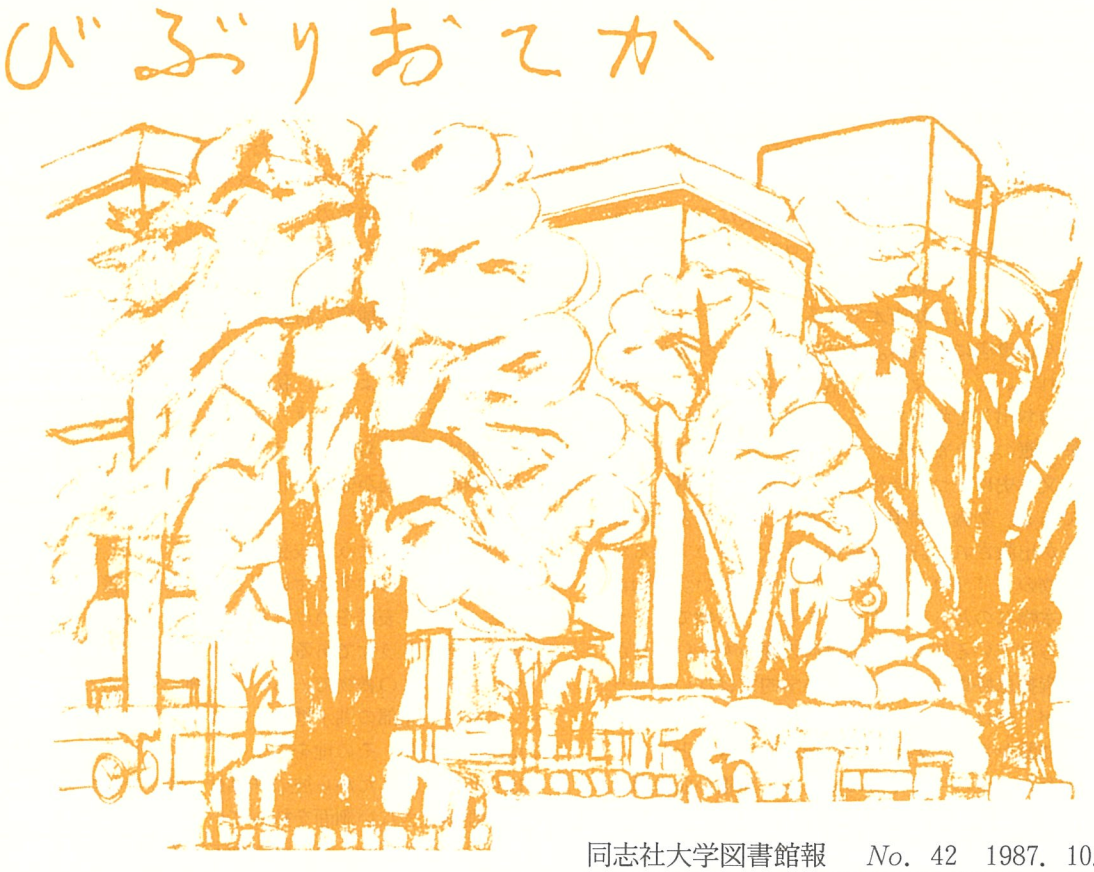


同志社大学図書館報　No. 42　1987. 10. 1

書物とは何だろう

一般教育委員長　薬師川　虹一

『リリカル・バラッズ』という詩集がある。1798年に出版されて、英文学史では一つの時代を画した詩集と言える。学生時代は何ら特別の注意をはらう訳ではなく、次々と出てくる作品や作家の名前の洪水に押し流されるがまゝに聞き流していたものである。それがいつの間にかイギリス・ロマン派の詩を専門に勉強するようになってしまった頃から何かと細かいことが気になり始めた。その上と言うか、学生時代から書き続けて来た詩が溜ってきて、詩集にまとめて自費出版などするようになり、詩集を編むということに、素人なりではあるがいささか気をつかったものである。

それや、これやで、専門の勉強でイギリス詩人の詩集を読む時も、見事に整理された作品全集を読まねばならないのだが、例えば年代順に並べられた全集を読んでいると何かばらばらな断片を読んでいるような空しさを感じるようになってきた。全集に収められている作品は、長い物ならそれだけで発表されたものもあるが、大多数の抒情詩は、幾つか集められて一冊の詩集として発表されたのであるから、それを制作年順に配列するということは、その詩が発表された時の状況を全く無視することになると思い始めたのであった。

そこで、『リリカル・バラッズ』のことであるが、ワーズワースの作品全集では全く解体されて面影をとどめてさえいない。書物とは何だろうか、と自問したくなるゆ

目　次

書物とは何だろう……1
ベスト・リーディングス……3
新設『レファレンス・コーナー』
&『雑誌室』紹介……4
4回生の諸君へ……5
図書館学に関する二次文献(中－2)…6
実例を中心とした資料のさがし方(32)…8
文部省補助金による購入図書……10
寄贈絵画紹介……11
ピックアップ
――洋学便覧初集　柳河春三輯――…12

えんである。この詩集は1798年に出版された、と書いたが、その初版には二種類あるという妙な背景を持っている。最初ブリストルで印刷されたのだが故あって間もなくロンドンで印刷された。出版社も夫々異なることは言うまでもない。普通ブリストル版、ロンドン版と呼ばれているが、ブリストル版は世界に三冊(？)しか現存していないと言われる幻の初版本であるが、ロンドン版は今日でも時々古書店に現れる。本学にもロンドン版が書庫に収められていて、ロマン派の話しをする時には、うやうやしく持ち出して教室でちらりと見せることにしている。岩波文庫のひとまわり大きい程度の小さな詩集で、これが英文学史に一つの時代を画した詩集かと驚くようなものである。勿論、簡単に手に入れられる薄表紙の学生用の版が出版され、詳細な解説や注釈がついているがそれは本物の『リリカル・バラッズ』ではない。本物はやっぱり本物なのだ。教科書用であろうと本物であろうと、収められている作品自体には何の違いもないのだから、本物崇拝は好事家的であり、科学的ではないと言う人も多いが、やはり何かが違うのだ。本物を手にした時、英文学史で聞かされた名前だけの詩集が生き物となって掌にその存在が伝わってくるのである。講義が血の通ったものとして蘇ってくるのである。そのスリルはどんなに精巧なファクシミリ版でも絶対に感じられないものである。そして、そのスリルの無い詩は私にとって乾いた活字の行列でしかあり得ない。

しかし、このような感情は学問の世界に無要な雑念でしかないかもしれないということも理解できるので、私は徒らな古物愛好家にはなりたくない。また、なりたくてもお金がないことも確かである。だが、古物愛好とだけで済まされない問題があるとなると事情は異なる。

『リリカル・バラッズ』はその後版を重ねて4版まで出るのであるが、ワーズワースの作品全集ではそのようなことは表に出てこない。英文学史でもそこまで細かく触れられることはない。そこで『リリカル・バラッズ』という詩集は一つしかないように思われかねないのだが、この詩集は結構、息の長い詩集であって、そのことは人気と重要性とを示すことになると同時に、よく見るとそこに4版に亘るこの小詩集の連続したドラマが浮上してくるのである。版が改まると、単なる増刷ではなく、何らかの新しい手が加えられることになる。例えば作品の配列が変わる。これは大きな出来事である。もし、個々の作品の独立性を主張するなら、詩集の中の位置など無意味なことになる。しかし、詩集を一つの作品とするとこの配列の変更は重要な意味を持つ。初版と再版とではこの詩集の場合、全く異った詩集とさえ言えるだろう。事実ワーズワースは詩集の表題を改めるよう出版社に再三申し入れているが、出版社は販売政策上表題の変更を認めなかったのである。しかし、タイトル頁が若干変更された。若干の変更だが、ここに詩人の第2版に対する姿勢が明白に読みとられるのだが、全集ではそれも仲々気づかれない。大英図書館や、ライダル・マウントのワーズワース邸には、四種の『リリカル・バラッズ』が並べてある。その作品の配列、タイトル頁の変更を見るだけで、詩人の心臓の動悸が陳列台のガラス越しに伝わって来るのだ。この四種類の詩集を自由に手にすることができればどんなに素晴しいことだろう。触れ合うことのかなわぬ恋人の姿のように、私の網膜には四種の詩集が焼きついて消えない。私の『リリカル・バラッズ』理解は永久に本物とはならないのだろうか。いつの日か、書庫にあの四種の詩集が並んで収まることを夢に見ているのである。

書物は生き物のように成長し、変化してゆく。全集を見ている限り、このドラマは感じられない。書物は単に中味をまとめて表紙をつけただけのものではなく、書物自体が生きたドラマであると思えてしかたがない。

ワーズワースの書物で、も一つの例を挙げよう。彼はイングランド北部の湖水地方と呼ばれる所で生まれて死んだ詩人であり、その地をこよなく愛していたことはよく知られている。だから彼の作品は、活字で読むだけでは十分理解できない側面を持っている。彼には湖水地方の美しい場所を紹介した『湖水地方案内』という書物がある。これも又、版を重ねること5度、第5版が決定版とされているが、初版から5版まで20年以上の年月が経過している。表題も微妙に違い、頁数も違っている。『リリカル・バラッズ』を初版から4版まで調べることと同様に、『案内』を初版から5版まで調べたいと思っているのだが、やはり材料が揃わない。詩集ではないのでこの場合は余り本物を求める気持ちは強くないのは我ながらずい分勝手なものだと思うのだが、その中で第2版だけは本物を手にしたいと切に思う。それは、この版にだけ「ダドン・ソネット」と呼ばれるソネットの連作が添えられているからである。このソネットの連作は勿論全集で読める訳なのだが、それが、『案内』と一緒になっていることに私は大変興味をそそられるのである。極めて実用的 ――現在でも通用する ――な案内書に、極めて宗教性の高い、又、『失楽園』を想わせる「ダドン・ソネット」を何故つけたのだろう。この二つを結ばせたものがワーズワースの心の中に必ずあったに違いないのである。「ダドン・ソネット」に注目している友人が今年の夏、ダドン川の水源に立って、その流れの蛇行を眺めて来た感動を熱っぽく語ってくれたが、私は『案内』第2版の秘密をいつか解きたいと思っている。それにしても本物がほしい。一体、書物とは何なのだろう。

ラーネッド記念図書館

ベスト・リーディングス

――どんな本が読まれているか――

ラーネッド記念図書館では、1年間に貸出された図書の中から貸出回数の多いものを順にリストアップし、“ベスト・リーディングス”を作成（コンピューターにより出力）しています。このベスト・リーディングスには、全分野（洋書を除く）を対象にしたものと主題別のリストの2種類があります。

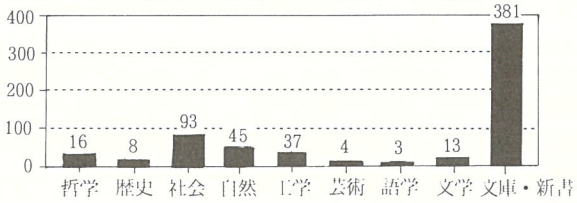
昨年度（'86年4月～'87年3月）のベスト・リーディング第1位は、「サムエルソン経済学序説」R・ロビンソン著で42回の貸出、第2位は「電気機器　1」中田高義、沖津泰編で36回の貸出、以下第3位「刑法概説　各論」大塚仁著（35回）、第4位「民法総則」我妻栄著（29回）、同4位「三幕殺人事件」アガサ・クリスティ著（29回）、第6位「サラリーマンよ悪意を抱け」赤川次郎著（28回）等々となっています。

ではどんな図書が読まれているのでしょうか。各分野毎にその特徴・傾向等を簡単に紹介してみましょう。(カッコ内の数字は貸出回数)

〔文庫・新書〕　新潮文庫の貸出が群を抜く、文庫・新書の総貸出冊数19,181冊（昨年度）の内、新潮文庫は実に11,032冊を占める。作家では星新一、筒井康隆、田辺聖子、司馬遼太郎、アガサ・クリスティ、コナンドイル、ヘミングウェイ等に人気が集中、新潮文庫以外では中公文庫、岩波文庫、講談社現代新書等の貸出が多い。

〔人文分野〕 000：総記では情報科学、特にコンピュータ関係のものが安定した貸出。100：哲学では西洋哲学、なかでもカントに関する図書の貸出が多い。その他、心理学の入門・概説書、仏教史関係の図書等が読まれる。また聖書についての関心も高い。「カント」岩崎武雄著（10回）、「カントの倫理思想」小倉志祥著（9回）、「聖書物語　旧約篇」パール・バック著（14回）。200：歴史では日本史、イギリス史、アメリカ史に関する図書の貸出が多い。日本史は考古学関係の図書が貸出の約7割を占め、中世・近世史関係のものは少ない。「隼人の考古学」上村俊雄著（11回）、「日本の考古学　3」河出書房（9回）、「（概説）イギリス史」青山吉信、今井宏編（15回）。700：芸術では美術史、西洋絵画、西洋音楽等が良く読まれている。「美術の歴史」H・ジャンソン著（14回）、「エゴン・シーレ」坂崎乙郎著（8回）、「モーツァルト」A・グライター著（11回）。800：語学　回数は少ないが言語理論関係の図書が安定した貸出。特徴としては、「はじめてのドイツ語」（13回）、「NHKフランス語入門」（15回）、「NHKスペイン語入門」（7回）等入門書の貸出が多い。900：文学　日本文学では古典物（万葉集、源氏物語、平家物語、近松等）の貸出が多い反面、近代文学は比較的少ない。英米文学ではD・H・ロレンス、シェイクスピア、ワーズワース、アーサー・ミラー、フォークナー、サリンジャー等の作品および研究書が良く読まれている。「日本古典文学全集　8」小学館（14回）、「万葉集注釈　1」澤瀉久孝著（10回）、「アーサー・ミラー全集　1」（23回）、「フォークナー全集 16」（15回）、「D・H・ロレンスの世界」羽矢謙一著（11回）。

上位600タイトル（貸出回数10回以上）に占める各分野の割合（件数）



ドイツ、フランスおよびロシア文学は英米文学に比べると貸出も少なく、特にロシア文学は最高でも「ドストエフスキー全集　6」の貸出3回。

〔社会分野〕 300：社会科学では憲法、民法、経済学、経済思想関係の貸出が顕著、その他、同和問題、社会福祉、日本教育史、文化人類学関係のものも安定した貸出。「憲法」佐藤幸治著（20回）、「民法案内　2」我妻栄著（16回）、「民法総則」四宮和夫著（15回）、「ミクロ経済学」バイラス著（15回）、「部落問題の解決」真田是著（11回）。600：産業では流通・マーケット論等が読まれている。

〔自然分野〕 400：自然科学では解析学、電磁気学、物理化学、有機化学、無機化学関係の図書の貸出が中心。その他、一般教育科目の関わりから天文学、地学、生物学の図書も安定した貸出。「微分・積分」田島一郎(ほか)著（15回）、「物理実験法」原留美吉、武田義章著（18回）、「無機化学」村上悠紀雄著（13回）、500：技術・工学では材料力学、機械工作、電気回路、電気計測関係の図書の貸出が多い。「機械工作」稲田重男（ほか）著（12回）、「旋盤マニュアル　工具・加工編」大河出版（11回）、「（詳解）電気回路演習　上」大下眞二郎著（14回）、「大学課程電気計測」前田憲一（ほか）編（14回）等々。

以上、各分野毎に見て来ましたが、皆さんの読みたい図書や図書館として必要な資料は今後とも積極的に収集して行きたいと思います。当館の収集は、1・2年次の授業・カリキュラムに沿った内容の図書や学習・教養のための資料を中心に、年間 7,000冊の図書が購入されています。出版目録や文献目録の調査、推薦図書の依頼（教員）、購入希望等により資料の充実を心がけて行きたいと考えていますので希望の図書があれば遠慮なく申し出て下さい。

〔今出川校地〕

新設『レファレンス・コーナ』&『雑誌室』紹介

先号でもオープンにあたって簡単な案内がされていますが、今回は設置の経緯、意義、蔵書構成、開設後数か月間の利用動向などについて紹介します。

雑誌室新設及び参考図書室拡充に至った主たる経緯としては、①昨年３月に車椅子利用者の為に、１階フロアーの段差対策としてリフトが設置された事により、現雑誌室フロアーへのブックトラックによる図書の搬送も可能となった。② '86年度以降作成の図書目録については、閲覧用目録カードを廃止し冊子目録に切替えたため、目録コーナーの大巾縮小が可能となり、書架増設のためのスペースが確保できるようになった。③田辺校地ラーネッド図書館が全面開架方式である事などから、今出川図書館でも開架式を拡大して欲しい旨、利用者サイドからの声もあった事。④館員サイドとしても、二校地化による係員減の中で、本の出納業務が大きな負担となって来ていた事などから、短期間にして書架増設の実現となった次第です。 '73年12月の開館時には開架５万冊が目安とされていた時代であったが、昨今では開架10万冊以上が当り前の時代であり、それにはやや及ばないものの、本図書館もこれでようやく開架式おおよそ９万冊の収容能力をもつに至りました（７月現在・開架式配架冊数８万数千冊）。

≪レファレンス・コーナー≫

メインカウンター前、目録コーナーに隣接して、図書館(学)、書誌(学)、文献目録類(000〜029)及び〔雑誌〕所蔵目録、目次・索引を配架した低書架群、それにレファレンス・カウンターを配置したフロアーを、レファレンス・コーナーと称する事になりました。これらの拡充により、参考図書の収容力は約１万５〜６千冊となりました。配架冊数も、書庫から相当の量を出したため、約１万２千冊に拡充しており、一応の目途となる規模に到達して来たといえます。情報化時代の急進展と共に二次情報・二次文献が一層重視されるようになり、参考図書の出版点数も増加する一方ですが、これで今後当分の受入態勢が整ったわけです。

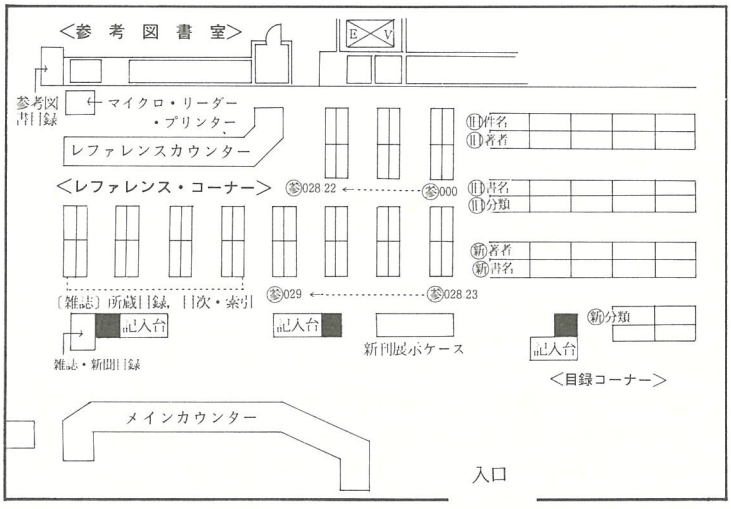
またこの新配置により、次のようなメリットが生じています。

①書誌（文献目録）・索引類と閲覧目録の近接により、相互の利用の便が良くなりました。大学図書館にあっては、一般的に書誌情報の提供がレファレンス・サービス件数の過半数を占めるといわれ、これら文献探索のための最も重要なレファレンス・トゥールがレファレンス・カウンター近くに置かれた事で、より効率的なレファレンス・サービスが可能になりました。

②レファレンス・コーナーがメインカウンターの前にある事から、メインカウンター側からも二次文献へのアプローチが簡単に出来、レファレンス・カウンターと一層緊密に連携しながら参考質問への即応がし易くなりました。その結果メインカウンターでの参考質問受付件数は、対前年同月比で５月はほぼ倍増、６月は８割増の著しい増加となって表われています。もっともこれには、雑誌室の新設などにより、本の出納が大巾に軽減され、館員もゆとりを以って利用者に接し得られるようになった事も大きな要因としてあげられねばならないでしょう。

③３年間物置に眠っていた長大なレファレンス・カウンターですが、この度ようやく（昨年11月頃から）最適の位置を見出し、より魅力的な形で再活躍することになりました。これにより、コンピューター端末機の設置などレファレンス業務の機械化にも対応できるようになっています。折しも、逐次刊行物の事務用検索・入力システムが今年５月より稼動し始めており、今秋には利用者用として逐次刊行物の学内所蔵最新情報までも検索可能な端末機がレファレンス・カウンターにも設置される予定となっています。将来CD－ROMや内・外部データベース等、コンピューターによる情報検索サービスなども必要になってくるでしょう。1989年４月からオンラインによる目録検索システム実現も企図されています。

以上のようにレファレンス・コーナーの整備により、図書館活動の中心としてレファレンス・サービスが高機能化・活性化して行く基礎が出来上ってきました。

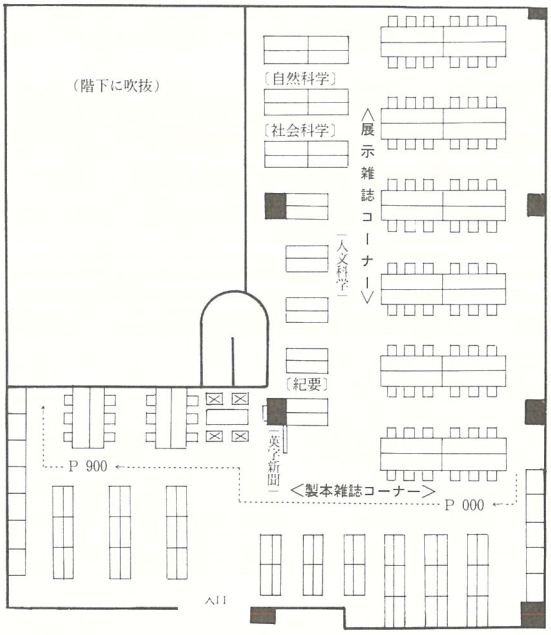


≪雑誌室≫

製本雑誌コーナーには、比較的利用の多い雑誌 210余タイトルを選択し、基本的には過去10年分の製本済バックナンバー約 7,500冊を配架しています。しかし例外的に全バックナンバーを出しているものもあります。例えば、かなり過去に遡って利用の多い法律関係とか、利用の多寡に関わらず同志社出版物とかです。

それにしても、短期間に、客観的な雑誌利用統計資料の乏しい状況で、急遽選定し、配架したものですので、利用頻度の低いものも混在しているようであり、色々と蔵書構成には不十分な点が残っています。今後、出納請求される雑誌を統計的に把握し、蔵書の見直しを行ない、もっと利用度の高い充実した蔵書構成に更新して行く予定です。

さて製本雑誌の部分開架制により、利用者は煩わしい閲覧手続や出納時間の制限などから開放され、気楽にバックナンバーにアプローチできるようになり、また雑誌カードケース周辺の混雑も緩和されました。雑誌の出納冊数も5•6月の抽出統計では、対前年同月比で4割近い減少となっています。内訳をみると未製本雑誌（大体最近1年以内の刊行物）の利用が4割弱を占めています。従って、製本雑誌の利用に関しては、そのほぼ過半数が雑誌室で充足されているのではないかと推測されます。



新刊雑誌展示コーナーもやや拡充し、コピー料金も1枚10円に値下げしていますので、今後の利用が期待されます。

4回生の諸君へ
書庫へ入庫できます

積極的な活用でよりよい卒論を

いままで書庫へ入れたのは教職員と大学院生のみでしたが、今年から4回生の学生諸君も入庫できることになりました。入庫者の枠を広げることは、書庫を管理する図書館としてはいろいろな困難があるのですが、学生諸君の勉学の総仕上げである卒論・ゼミ論の作成の一助にとあえてふみきりました。

全蔵書の八割の二十数万冊が書庫
――図書館利用のポイントは書庫――

みなさんがいつも眼にしている図書館の本は、新しいもの、基本的なもの、利用度の特に高いものなどごく一部です。したがってみなさんが少したちいった勉強や研究をしようと思えば、開架だけでは資料が不足するはずで、書庫の本の利用が不可欠になってきます。

旧分類図書はすべて書庫です

旧分類図書、即ち、昭和39年3月以前に受け入れられた本はすべて書庫です。創立当初の同志社英学校時代の本をはじめ、多くの先輩や建学の精神に共鳴したすぐれた人達の寄贈された蔵書を含み、社会的に見ても重要な資料となっています。

新分類図書も書庫のほうがずっと多い
――ぜひ一度は目録で検索を――

昭和39年4月以後受け入れの新分類図書もその多くは書庫です。特に、高価で大型の美術本はほとんど全部、数十冊、数百冊にもなる大きな資料類、すべての判例集、多くの逐次刊行物・統計類、個人伝記のすべて、その他必ずしも利用度の高くないもの等多岐にわたる資料が書庫で諸君の利用を待っています。

書庫の本にかぎり4回生に特別貸出をします
――ゼミの先生の一筆が必要――

卒論・ゼミ論を書くのに必要な場合、先生のその旨の一筆があれば、貸出期間、冊数とも特別な貸出をしますからカウンターにおたずねください。

図書館学に関する二次文献（中-2）

本年４月より利用率の高い雑誌は雑誌室に出し、開架式にしました。開架式にした雑誌のほとんどは、1977年以降10年分を出しています。下記文献の雑誌で㊙と表示しているものは雑誌室に出しているものです。

＜図書整理（前号からの続き）＞

50. “我ガ国ニ於ケル目録法ノ研究―ソノ沿革ト業績―” 天野敬太郎『書研究』Vol.12 №.4 1939年12月 p.407-483（㊙P010.１；T10）所収

明治22年11月から昭和13年12月までの間に発刊された邦文図書、雑誌記事 265点を発表している。各々に解説をつけ、末尾に執筆者索引（50音順）と発表年月順索引を付している。

51. “排列法ニ関スル書誌” 天野敬太郎『書研究』Vol.14 №.3 1941年７月 p.379-380（㊙P010.１；T10）所収

明治25年から昭和14年までの関係邦文雑誌記事37点を筆者の50音順に配列している。

52. “図書目録法（和書）＜文献の手引＞” 天野敬太郎『図書館雑誌』Vol.53 №.7 1959年７月 p.246-247（㊙P010.１；Ｔ２）所収

邦文図書と雑誌記事38点を10分類に分け、解説しながら紹介している。

53. “文献表＜図書の整理(２)目録＞” 山下栄『図書館界』Vol.11 №.2 1959年８月 p.52-56（㊙P010.１；T）所収

目録関係の邦文雑誌記事177点を13項目に分けて、リストアップしている。

54. “文献＜図書の整理Ⅱ目録＞” 石塚栄二『図書館界』Vol.19 №.4 1967年11月 p.127-132（㊙P010.１;T）所収

昭和34年以後の目録法の主な動きを、文献番号を示しながら解説し、その後に邦文図書、雑誌記事を 236点紹介している。

55. “文献＜図書の整理(１)分類＞” 鈴木賢祐『図書館界』Vol.11 №.2 1959年８月 p.41-44（㊙P010.１；T）所収

分類法に関する図書と雑誌記事を118点掲げている。

56. “戦後ＮＤＣ関係文献目録”『図書館雑誌』Vol.53 №.9 1959年９月 p.398-399（㊙P010.１;Ｔ２）所収

戦後のＮＤＣ関係の図書、雑誌文献を約50点紹介している。

57. “図書館分類法の100年略史、目録法の100年略史（参考文献付）” 服部金太郎『現代の図書館』Vol. 7 №.1 1963年３月 p.17-32（㊙P010.１；G）所収

明治・大正・昭和にかけての略史を紹介し、各々最後に十数点づつの参考文献を列挙している。

58. “文献目録＜図書の整理Ⅰ分類＞” 森耕一『図書館界』Vol.19 №.4 1967年11月 p.122-125（㊙P010.１；T）所収

分類に関する図書、雑誌記事84点を18分類に分けて紹介している。

59. “参考文献”『件名目録の作り方』全国学校図書館協議会編・刊 1955 p.130-133（㊤024.344；Z)所収

1948年～1954年に公表された目録法及件名目録に関する参考文献を単行書、雑誌記事の２部に分け63点をあげている。配列は著者又は執筆者の50音順である。

60. “参考文献＜図書の整理(３)件名＞” 石塚栄二『図書館界』Vol.11 №.2 1959年８月 p.61-63（㊙P010.１；T）所収

戦後を第１期（昭和24年～29年）、第２期（昭和29年～31年）、第３期（昭和31年～）に分けて邦文図書、雑誌記事56点を紹介している。

61. “辞書体（件名）目録参考文献”『件名作業』（図書館実務叢書11巻）加藤宗厚 理想社 1967 p.308-314（㊙014.35；Ｋ２）所収

1892年～1956年の間に発行された邦文及び英文の図書、雑誌記事約120点を年代順に掲げている。うち18点には解説を加えている。

62. “文献表＜図書の整理Ⅲ件名＞” 山下栄、藤井千年『図書館界』Vol.19 №.4 1967年11月 p.136- 138（㊙P010.１；T）所収

1948年～1967年までの邦文図書、雑誌記事68点を７分類に分けて列挙している。

63. “新聞切抜きについての文献案内”（平川千宏）『知識の組織化と図書館－もり・きよし先生喜寿記念論文集』もり・きよし先生喜寿記念会編・刊 1983 p.81-95（㊙010.４；C）所収

１．には図書、雑誌の特集等を中心に切抜きの方法を詳しく書いてあるものを、２には機関別および個人のための文献を掲げ、１.２.あわせて約55点を紹介している。

64. “和文参考文献”（深井人詩・戸田慎一）『書誌作成マニュアル ――文献目録を作る人のために ――』日本索引家協会編 日外アソシエーツ 1981 p.113-120（㊙014.３；Ｓ４、田辺020；シ）所収

書誌全般、書誌解題、人物書誌、主題書誌、索引一般、個別索引の6項目に分け、各項目毎に著者（執筆者）名の50音順にあげている。96点が掲載されている。

65. **“日本における情報検索電算化の実施例（付）参考文献”** 堀込静香『図書館界』Vol.28 №.1　1976年5月　p.17-26（㊞P010.1；T）所収

参考文献は1.情報検索（一般）、2.図書館の機械化、3.情報検索電算化の実施例に分けて、1.は25点、2.は8点、3.は127点をリストアップしている。

66. **“情報・ドキュメンテーションに関する国内文献総索引 ——1976・1977・1978——（その1）、（その2）”** 中井浩『情報管理』Vol.22 №.3、4　1979年6月、7月　p.161-183、p.282-310（㊞P014；J）所収

「科学技術文献速報・管理システム技術編」14〔3〕-16〔2〕に収録されている論文を独自の分類法で分類し、項目内は第1著者の50音順に配列している。その1約560点、その2約590点。

＜図書運用＞

67. **“参考文献”** 『図書運用法－図書館奉仕の理論と実際』南輪造　蘭書房　1955　p.243-255（㊞025；M3）所収

この図書を著わすために参照された主な文献を収めている。図書、雑誌論文約235点を単行本、雑誌に分けて邦文は著者の50音順、欧文は著者のアルファベット順としている。

68. **“レファレンスワーク＜文献の手引6＞”** 北島武彦『図書館雑誌』Vol.53 №.6　1959年6月　p.212-213（㊞P010.1；T2）所収

大正13年3月より昭和33年10月までの図書、雑誌記事を取りあげ、解説しながら邦文30点、欧文5点を紹介している。

69. **“参考文献＜図書館奉仕Ⅱレファレンス・ワーク＞”** 塩見昇『図書館界』Vol.19 №.4　1967年11月　p.145-148（㊞P010.1；T）所収

レファレンス・ワークの本文で文献をとりあげながら、解説を加えている。館種別に分け、単行書、雑誌論文を 1951年～1967年の発表年順に115点掲げている。

70. **“文献目録；図書館活動の現状と課題”** 『図書館界』Vol.23 №.6　1972年3月　p.240-252（㊞P010.1；T）所収

○公共図書館におけるレファレンス
（1960～1971）　約130点
○大学図書館におけるレファレンス
（1952～1972）　約230点
○指定図書制度 ——大学図書館（1959～1971）約40点

図書館関係雑誌を重点的に、それぞれ年代順にまとめている。

71. **“文献展望＜図書館奉仕1978—1980＞”** 長野昭『図書館学会年報』Vol.28 №.1　1982年3月　p.37～42（㊞P010.1；T3）所収

1978年～1980年にあらわされた文献を、閲覧、貸出、レファレンス・サービス、障害者サービス、児童サービス、複写と著作権の6項目に分けて説明を加えながら紹介している。

72. **“図書館間の協力と組織化に関する文献目録－戦後・国内・雑誌論文における－”** 森脇徹『図書館界』Vol.15 №.6　1964年3月　p.212～214（㊞P010.1；T）所収

1949年～1964年に発行された、関係の邦文雑誌記事を11分類に分けて115点（他に戦前主要論文12点）を列挙している。

73. **“参考文献（抄）”** 『図書館活動』（図書館学テキストシリーズ10）前島重方　理想社　1983　p.196-204（㊞015；M3、田辺015；マ）所収

1952年～1980年までに出版された邦文図書を7項目に分類し、著者名の50音順に配列している。約160点あげている。

74. **“障害者に対する図書館サービスに関する文献目録（稿）〔1〕－〔12〕”** 『国立国会図書館月報』№.183-№.194　1976年6月～1977年5月（閉P016；K3）所収

書誌コーナーに12回連載している。1976年までの雑誌記事、新聞記事、単行書、文書・その他 460点を巾広く拾いあげている。

75. **“日本点字図書館資料室所蔵・視覚障害者の読書と図書館サービスに関する文献目録”，”日本における図書館員の障害者サービス年表”** 『図書館と国際障害者年』日本図書館協会編・刊 1982 資料目次p.40－105、p.106－127（㊞015；N）所収

日本点字図書館資料室で1981年末までに収集された関係の図書・資料、逐次刊行物を書名（誌名）の50音順に、雑誌記事は発表年月日順に配列した目録である。約600点掲載している。又、年表は日本における障害者に対する図書館サービスについて明治37年(1904)～昭和56年（1981）までを年代順に追っている。見やすいように大型の活字が使用されている。

76. **“視覚障害者の読書と図書館サービスに関する文献目録（追録1）——日本点字図書館資料室所蔵——”** 『としょかんサービスこれからの課題 ——障害者と読書権 ——1981～1990』日本図書館協会編・刊　1984　p.325～345（開閉015.1；T）所収

前出75.の追録である。日本点字図書館資料室で1982年1月～1983年3月までに新たに受け入れた関係の図書論文・雑誌記事約150点を、発表年月日順にまとめている。これも大型の活字が使用されている。

実例を中心とした 資料のさがし方 —32—

〔質問例　1〕

エイズ、反核運動、韓国情勢等についてアメリカの主要な雑誌にどんな記事があるか調べたい。

〔回答〕

Reader's guide to periodical literatureで調べます。エイズはAIDS（disease）の項目ででてきます。反核運動はまずAgainst nucleare movementで引いてみましたがでてきません。そこで今度は Nucleare energyで引いてみるとAnti-nuclear movementをも見よという参照がありました。即ち、Againstではなく Anti-からだったわけです。このように参照がていねいにありますから大体の見当をつけて引けば、やがて必要なところへ行けるようになっています。韓国情勢についての記事は Korea（South）ででてきます。この雑誌記事索引は、アメリカの一般社会人を対象とした代表的雑誌約 180誌の記事をリストアップしています。著者名、件名、記事題名（ときどきのみ）でさがせるようになっています。アメリカでもっともよく利用されている記事索引です。

この記事索引は9月から6月までは月2回刊、7月と8月は月刊です。累積版が年に4回、さらに翌年1年分が累積されます。このようにたびたび累積されるので大変便利です。毎号巻末に著者名で検索できる書評記事の索引ものっています。このように大変重宝な記事索引ですが問題は必ずしもキチンと定期的に日本へ送られてこないことです。たとえば4月25日号が6月3日にきているのに、その後の号がそれから3か月近くもたつ8月末現在きていません。アップ・ツウ・デイトな記事を調べるときこのことが大きな障害になることがあります。この点を念頭において利用する必要があるでしょう。この記事索引は今出川図書館のメインカウンター前に 1,900年以後全部でていますから一度御覧ください。

〔質問例　2〕

Economist, Newsweek, Timeのここ数か月の目次を調べたい。

〔回答〕

マンスリーインデックスというビジネスマンのための雑誌記事索引があり、巻末に海外8誌の目次が1か月分づつ掲載されています。Business week, Far eastern economic review, Forbes; magazine of business, Fortune, Newsweek, The Economist, Time; the weekly news magazine, U.S. news & world reportの8誌です。1か月半か2か月のおくれでのります。たとえば、Time の場合、6月8日号から29日号までの1か月の目次が8月号に掲載されています。

尚、この**マンスリーインデックス**は海外誌だけでなくビジネスマンが読みそうな国内誌45誌の目次とそのインデックス（人物、企業、総合の三種）をのせており、こちらのほうが主となっています。またデータベースや書籍の紹介もしています。しかし対象が一般ビジネスマンなので学術的なものはあまり含まれていません。学生諸君が使うには大きな限界がありますが週刊誌を含むこと、記事索引のなかでは他のものより速報性にすぐれていること、総合雑誌、経済、経営関係の一般的雑誌を含んでいる点などを念頭において使えばよいでしょう。

〔質問例　3〕

銀行論の記事を外国の学術雑誌からさがしたい。

〔回答〕

外国といってもいろいろあるわけですが、この場合聞いてみると大体アメリカのものでよいとのことなので、Social sciences indexを使うとよいでしょう。先の質問例で紹介したReader's guide to periodical literature は一般社会人むけの主要雑誌を対象にしているのですが、このSocial sciences indexは社会科学系の学術雑誌を対象にしています。

収録されている雑誌は1985年度の場合約 400誌、そのうちアメリカの雑誌が8割強の約 330誌、ついで英国が約40誌で1割、あとはカナダ8誌、オランダ7誌、スイス2誌、オーストラリア2誌、その他ヨーロッパ諸国4誌、アジア・アフリカ関係2誌となっています。このように収録誌は圧倒的にアメリカの雑誌ですが、一応その他各国からも少しづつ収録し、或る程度世界的に見られるようにしています。その収録傾向を心得て利用すれば便利な学術雑誌の記事索引誌です。アメリカでは先に紹介したRGに次いでよく利用されています。

この記事索引は著者と件名で引けるようになっています。この質問の場合「銀行論」なのでBank...でさがしてみましたがなかなかでてきません。さらにずっと見ていくとBanks and bankingという項目があり、この中にさがしていた記事がでてくるようです。この項目の中にさらに細目があって各国別の銀行事情についての記事もさがせるようになっています。巻末には毎号書評記事の索引も掲載されています。

Social sciences indexはHumanities indexとともに1974年から出版されています。 quarterlyで出版され、翌年に1年分が累積されます。Humanities index

は人文科学系の学術雑誌を対象にしています。

この2誌は、以前はSocial sciences & humanities index(1965－1974）として出版されていました。さらにその前はInternational index to periodicalsという誌名で1907年から1965年まで出版されました。

以上外国の雑誌記事索引を紹介してきましたが、それらはいずれも巻頭にPeriodicals indexedとして収録誌一覧表をのせていますからそれを見て利用するとよいでしょう（RGのMonthlyとSemi-monthlyは除く）

〔質問例　4〕

次の雑誌の所蔵館を調べたい。

① Journal of American Academy of Religion. 39号　② Zeitschrift für Soziologie. 1980と1982.

〔回答〕

雑誌の所蔵館を調べるには**学術雑誌総合目録**を使います。この目録は人文・社会科学欧文編（1980）と自然科学欧文編（1979）及び欧文編補遺版（1982）、それに和文編（1985）があります。この質問の場合は人文・社会科学欧文編で調べます。①は東大文　35（1967）＋ほか2ケ所が持っているとでています。その意味は、東大の文学部に35号（1967）以後継続して全部ある、ということです。＋は以後継続して受け入れているという意味です。②は19大学が持っているとでています。所蔵館は、北海道とか近畿とかのブロック毎に表示されています。②の所蔵館の内近畿ブロックで同志社にもっとも近いところをさがすと京都外大が持っていることがわかります。

〔質問例　5〕

Prepr Am Chem Soc Div Pet Chem(USA）28〔5〕1230－1238(183)のフルネームと所蔵館を調べたい。

〔回答〕

石油化学関係のものらしいので学術雑誌総合目録の自然科学欧文編（1979）及び欧文編補遺版（1982）でさがしましたがでてきません。学術雑誌総合目録にない場合、洋雑誌のときは**外国雑誌センター現行受入目録（1987）**でさがしてみます。でてきました。 Preprints Symposia American Chemical Society Division of Petroleum Chemistry でした。東京工業大学の外国雑誌センター館にありました。しかしこの目録は単なる現行受入目録なのでいつの何号から持っているかはわかりません。従ってこの目録ででてきたらあとは必要な号数があるかどうか所蔵館に図書館から問い合わせます。

外国雑誌センター現行受入目録は出版が1987年3月と大変新しいこと、文部省の特別予算で集中的に外国雑誌を受け入れている国立大学の目録であることから、学術雑誌総合目録にないものがしばしばでてきます。特に新しい雑誌の所蔵館を調べるのに大変有効な目録です。

〔質問例　6〕

Journal of robotics and automation（IEEE）の所蔵館はどこか。学術雑誌総合目録や外国雑誌センター現行受入目録もみたがでてこない。

〔回答〕

こうした場合、書名の記憶違いや引用文献のミスプリントだったりすることがよくあるので、この書名が正しいかどうかの確認をします。雑誌のこうした書誌事項の調査にもっともよく使われるのはUlrich's international periodicals dictionaryです。これは世界で発行されている雑誌 68,800（第25版）を534の主題にわけてリストアップしています。それぞれの誌名毎に価格、刊行頻度、出版社、発行部数、使用言語など評細な書誌事項を掲載しています。国際機関の発行する2千以上の雑誌リストものせています。巻末には書名のアルファベット順索引もあります。

この索引で調べてみましたがでてきません。それで念のためIEEEから引いてみるとでてきました。書名の初語が間違っていたのです。IEEE journal of robotics and automationでした。しかし、その書名で学術雑誌総合目録や外国雑誌センター現行受入目録で調べてもでてきません。そこで今度はロボットに強い大学や旧帝大の個々の大学の雑誌目録を順次調べてみました。すると東北大学逐次刊行物受入目録(1987)にでてきました。

学術雑誌総合目録の自然科学欧文編及び欧文編補遺版も発行が1979－1982年でかなり古い。外国雑誌センター現行受入目録は新しいけれども収録対象は外国雑誌センター館の予算で購入したもののみの目録で、同じ大学が通常の図書費で購入した雑誌は含まれていません。したがってこの質問例の場合は最後には個別大学の新しい雑誌受入目録などで調査する必要があるわけです。

〔質問例　7〕

Biblische Notizen という雑誌はなにをみてもでてこないが、ほんとうにこういう雑誌があるのか確認したい。

〔回答〕

昨年秋に先に紹介したUlrich...より収録数の多い雑誌参考図書が出版されましたのでそれで調べてみます。The Serials directory; an international reference-book です。これには11万3千以上の雑誌が147の大項目のもとにリストアップされています。3巻からなり、その3冊目の索引で調べてみるとでてきました。間違いなくドイツで発行されている雑誌です。

今回は洋雑誌に関する質問をとりあげてみました。ここに紹介した参考図書は今出川図書館のメインカウンター前においてあります。学術雑誌総合目録および Ulrich の本は田辺のラーネッド記念図書館にもあります。

文部省補助金による購入図書

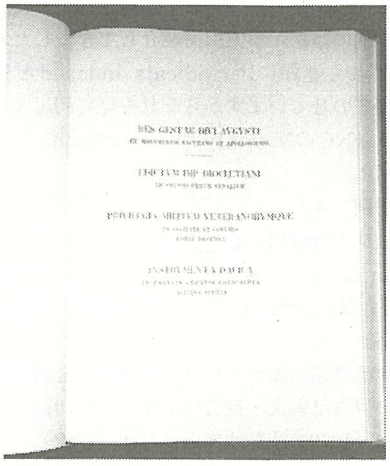
――ラテン碑文集――

浅　香　　正

古代ローマ史の研究にとってもっとも必要な資料はローマ人あるいは彼らと直接関係のあったギリシア人などによって直接書れたものであるが、今日われわれが使用しているラテン語やギリシア語のテキストはいくつかの写本をへて伝えられたもので、ローマ時代そのものの文献資料は皆無といっても過言ではない。しかしローマ時代の人びとは短文ではあるけれども、大理石などの石材や銅板などにかれら自身の記録を残してくれている。われわれはこのような形で残された資料を碑文、刻文あるいは石金文と呼んでいる。この碑文に属するものとして墓碑銘、奉納銘、公共建造物碑、あるいは公文書に属する条約、法律、元老院告示、植民市や各都市の条令などを列挙することができよう。

このたび同志社大学で購入された『ラテン碑文集』CORPVS INSCRIPTIONVM LATINARVM は今日まで出土したローマ時代の碑文をほとんど収録したものであり、ローマ研究にとって必要欠くことのできない根本資料である。『ラテン碑文集』の編集、刊行事業は1847年当時のベルリン学士院の依嘱を受けたローマ法の碩学テオドール・モムゼン（1817－1903）によって進められ、現在ドイツ民主共和国の学士院のもとで継続して行われている。同志社大学がこの碑文集を購入したときは（1983年）、全16巻と補遺を含め69冊に及ぶ図書であったが、その後も刊行が続けられ、現在では74冊に達している。第一巻は前44年ユリウス・カエサル（ジュリアス・シーザ）が暗殺された前44年までの碑文、第二巻から第十五巻までは主として上記以後のローマ、イタリアおよび各ローマ属州から出土した碑文、第十六巻は軍状、第十七巻はローマ帝国の里程標に関する碑文をそれぞれ収録している。

以上は『ラテン碑文集』の概要でみるが、そのうちもっとも有名な、ラテン碑文学の女王ともいわれる『神皇アウグストゥス業績録』RES GESTAE DIVI AVGVSTIを紹介しておこう。ローマ初代の皇帝アウグストゥスは死の直前に自分の業績を記し、死後次の皇帝となったティベリウスがそれに手を加え、その業績文を青銅板に刻み、今日も残っているアウグストゥス帝の霊廟の正門入口の大理石柱にその青銅板をはめ込んだ。このことはローマの歴史家スエトニウスが106－113年の間に記したといわれる『皇帝列伝』に明記されている。しかしその青銅板は大理石柱とともにいつの間にか散失し、長い間業績録の内容は不明であった。しかるに1555年その業績録が発見されたのである。かつてのローマ帝国の属州ガラティアの都であった小アジアのアンキュラ（今日の



トルコの首都アンカラ）に「ローマとアウグストゥスの神殿」が建てられ、その神殿の玄関の間の内側の左右の壁面にラテン語で、外側の壁面にギリシア語でアウグストゥスの業績録が彫刻されていることがわかった。勿論正文はラテン語で、アジアの住民に理解されるようにギリシア語の訳文を外側に彫刻したものと思われる。しかしながら長い歳月の間に業績録の刻み込まれた大理石の壁面はところどころ破損し、その全文を正確に復元することは困難であったが、モムゼンは1865年ラテン語文およびギリシア語文の校訂本をつくり、1873年刊行された『ラテン碑文集』の第三巻第二分冊に収録した。またモムゼンはラテン語文の欠損部分をギリシア語文で補い、『神皇アウグストゥス業績録』の完全なラテン語文テキストを復元した。このモムゼンの校訂テキストが長い間アウグストゥスの業績録として使用されていたのである。ところが1914年同じ小アジアのアンティオキアと呼ばれる都市からラテン語文の業績録の断片が発見され、モムゼンが復元したラテン語文の一部は誤っていることが指摘されるにいたった。このためアウグストゥスの元首政治の解釈をめぐって大論争がおこり、今日においてもその問題は十分に解決されたとはいえない状態である。モムゼンは地下でこの論争をどのようにみているであろうか。しかし『ラテン碑文集』に収録されている『神皇アウグストゥス業績録』はアウグストゥス研究の根本資料であることにかわりはない。

現在同志社大学大学院生および卒業生を中心にして関西に住むローマ史研究者が「ローマ属州研究会」を組織し、活発な研究活動を行っているが、この『ラテン碑文集』はわが国におけるローマ史の研究に大きな貢献をなすものと信じている。

（文学部教授）

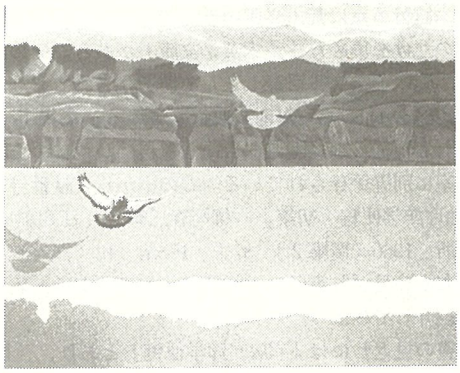
ラーネッド記念図書館　寄贈絵画紹介

「飛ぶ」「廻遊」「笛を」「水蓮の池」

開校されて１年半の田辺キャンパスは、植栽された樹木の枝葉も少しずつ伸び、図書館前に張りつめた芝も緑あざやかな色となり、学生・教職員の目を楽しませてくれる昨今である。ラーネッド記念図書館は、蔵書数も開校時に比すと約14,000冊増加し、特にランチタイムには学生諸君の利用で活況を呈している。

今年の春、田辺校地開校記念として文学部金田民夫教授立会のもとに、下記にご紹介する金田ゼミ卒業生等の方々からご力作の絵画が寄贈され、ラーネッド記念図書館に飾り付けられました。

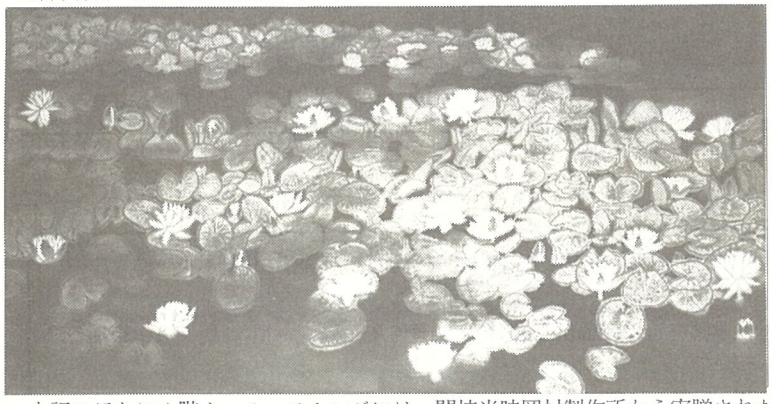
寄贈者のご厚志により、図書館利用、勉学のあいだのひとゝきに一層のやすらぎを与えてくれることでしょう。



絵画題「飛　ぶ」（アクリル絵具　130cm×162cm）
制作・寄贈者　河野穣而氏（1956年本学文学部美学専攻卒業　京都の洋画－現代作家７人展、京の四季展ほかに出品　第39回京展審査員　個展十回　モダンアート協会会員）　寄贈作品は、1980年制作
飾付場所　参考図書・雑誌室（２階）

絵画題「廻　遊」（油彩画　167cm×130cm）
制作・寄贈者　小田洋子氏（1958年本学文学部美学専攻卒業　チャーチル会京都会員）寄贈作品は、1986年度全関西行動美術展（大阪市立美術館、京都市美術館）に出品されたもの
飾付場所　第１開架閲覧室（２階）

絵画題「笛　を」（膠彩画　135cm×167cm）
制作・寄贈者　神林久子氏（文学部美学専攻神林恒道講師夫人）寄贈作品は、第33回全関西展(大阪市立美術館 1986年）に出品されたもの
飾付場所　第２開架閲覧室（３階）



絵画題「水蓮の池」（墨金彩画　180cm×360cm）
制作・寄贈者　冨士原桃子氏（1956年本学文学部美学専攻卒業）寄贈作品は、第36回創造展（東京都立美術館 1983年)に出品されたもの
飾付場所　第１読書室（１階）

上記のほかに１階ホール・ラウンジには、開校当時岡村製作所から寄贈された絵画「天地玄黄」（玄－木下佳通代氏、黄－奥田善巳氏制作　250cm×550cm　２点１対）が飾られている。

なお、神林久子氏からは、上記「笛を」と同時に「白い花と」「海の見える部屋」が寄贈され、それぞれ香柏館１階東ホール、磐上館２階会議室に飾られている。

ピックアップ……

洋学便覧　初集

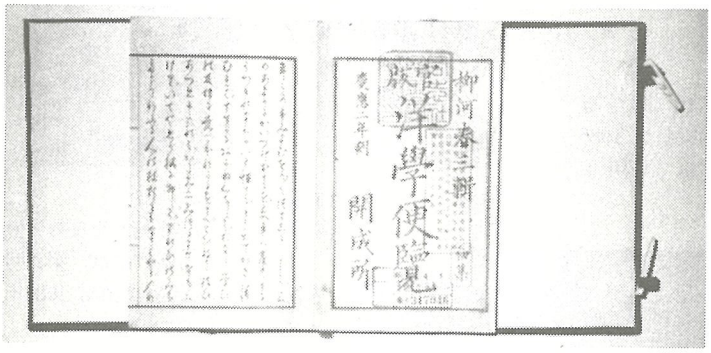
柳河春三輯

本館貴重室に荒木文庫のうちで、特に英学に関するものだけを集めた「荒木英学文庫」がある。その内容は「荒木英学文庫目録」として冊子化されており、総数 264タイトル、331冊を収録している。これらはいずれも現在入手が困難な貴重な資料ばかりなので、貴重室に別置保存されている。この中から文献番号≪20「袖珍洋学便覧　初集」　柳河春三輯　〔江戸〕　開成所　1966（慶應２）37丁　19cm　和（帙入）　題簽および見返し書名：洋学便覧〔B402,105；Y〕≫を紹介してみよう。

本書の見返しには「官版　洋学便覧」とあり、「開成所」とあって、これは官版天文・地理書であることが分る。当時としては珍らしい。その「例言」によれば、本書は全体を天文・地理・節序・人事・歴世・官職・文学・理学・化学・重学・医学・兵学・砲術・百工・物産・度量の通計十六門に分けて刊行することになっている。また巻末の「袖珍洋学便覧」の書名冠称から、現在の所謂文庫本スタイルで刊行する予定だったことが窺える。現存するのは初集と慶應三年刻の節序・度量貨幣部を収めた二集のみとされていて、予定の十六門全部は遂に公刊されなかったと言われる。初集の中、天文類では太陽と地球の距離や地球の面積・重量・自轉・公運等について新知識を紹介している。地理類の項は初集37丁の中26丁を使い世界地理を表にして概説したものである。それは幕末開国期に流行した世界万国国勢統計表とでもいわれるべき世界地理研究の基礎的資料ともいえる。

本書の著者、柳河春三は天保三年（1832）名古屋に生れた。生まれながらの神童と言われ、十二歳のとき西洋砲術の書を著わし、安政四年出版の「洋算用法」はわが国洋算書の嚆矢といわれ、また慶應三年に創刊した「西洋雑誌」はわが国最初の雑誌とされている。ことに語学は蘭・英・独・仏語を総て独学で自由にした。元治元年（1864）に開成所教授方となり、慶應四年には開成所の頭取となる。明治二年大学少博士となったが、翌三年に肺病により三十九歳で急逝した。

旧幕府の「蕃所調所」「洋書調所」さらに「開成所」と改称された組織では、新聞翻訳事業が最も重要なものであった。当時この事業に終始した開成所の教授連は20人で、皆幕末から明治にかけて活躍した洋学者である。柳河春三は実にそのリーダーであった。彼等が翻訳した新聞・雑誌は次のような邦訳名で後世に残されている。「日本貿易新聞」「日本新聞」「日本新聞外篇」（幕末明治新聞全集第１巻〔P071；B２〕）「中外新聞」「中外新聞外篇」（同上第３巻）「西洋雑誌」（明治文化全集第５巻雑誌編〔201.6；M5〕）



柳河春三は、語学の天才であったため、兵書、医書、語学書の別なく、大きくいえば手あたり次第に翻訳した。幕末動乱期の新聞雑誌文化移入の第一人者であり、欧州文化の移入に大きな功績を残した先覚者の一人であった。幕末洋学界の総師たる柳河春三の著であるが故にこの「洋学便覧」はこの時代洋学の総括と見ることができ、従って、当時の新知識の総括的な天文学、世界地理書と見ることができるであろう。

“びぶりおてか”　同志社大学図書館報　No.42　1987年10月1日　発行

発行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電話　251－3971

編集責任者　西田逸郎（図書館庶務課長）　印刷　眞興社